

にし じょう めん
西 上 免 遺 跡

調査の経過

西上免遺跡は一宮市今伊勢町馬寄及び尾西市開明町にかけてひろがる複合遺跡であり、現況は標高7mの水田及び畑地である。遺跡の西側は微高地に連続し、「野府城」が集落の中でその痕跡を留めている。西上免遺跡は弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されているが、しかし本格的な調査は今回がはじめてである。調査は1991年(平成3年)2月～3月にかけて東海北陸自動車道建設予定地内(一宮市今伊勢町大字馬寄字東瀬古)において実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、上から耕作層・黒褐色粘質層・黄色シルト層の大きく3層からなり、水田耕作地では第2層の黒褐色粘質土が削平されている。中世の遺構については、第2層上位にて遺構検出が可能であるが、それ以前のものについては極めて困難であり、遺構の正確な把握のためには第3層上位面にての確認が必要となる。したがって結果的に2面の遺構検出が必要となった。

調査区内で確認できえた主要な遺構は、下記のとおりである。

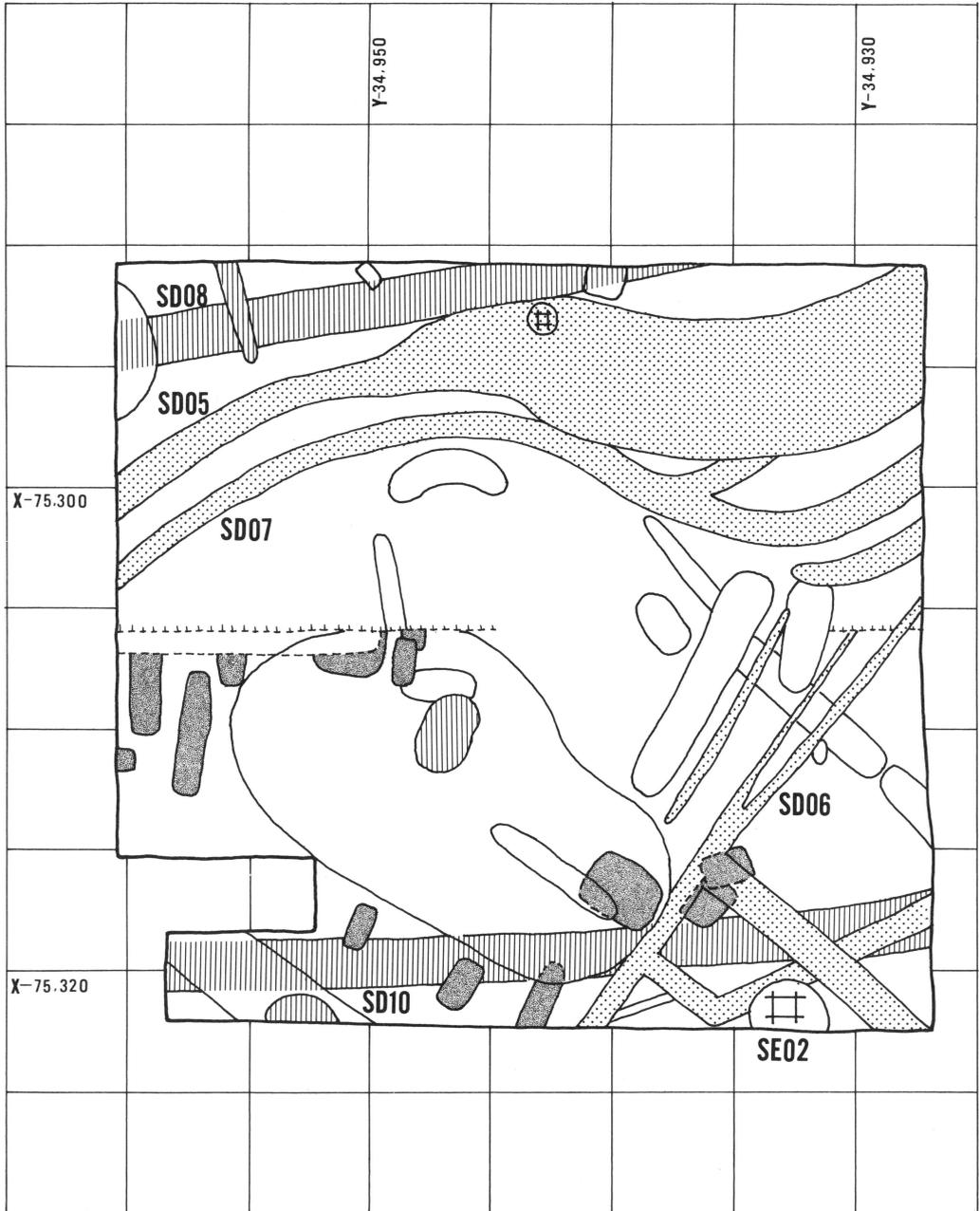
鎌倉時代後半 溝13条・土坑6基・土壇13基・井戸2基その他柱穴多数

奈良時代 溝4条・土坑2基

古墳時代前期 土坑1基・竪穴住居1棟

今回の調査において比較的遺構の関係が把握できる鎌倉時代後半(13世紀後半～14世紀前半)の遺構についてその性格を概観すると、まず調査区北側には窪地を利用するかたちで数条の蛇行する溝が掘削されており、その北側と南側には微高地が展開するものと考えられる。特に今回調査できた南側については、ほぼ全域にわたり土壇群が点在しており、その分布の状況は、数基単位で一つのまとまりが存在する。こうした土壇群の単位は、調査区東から西へ順を追って構築されていたものと推測できる。また調査区南東に位置するSD06はこれらの土壇群の東端を区切る遺構として重要な位置を占めるものと思われ、同時にその東側には、井戸SE02・溝・柱穴が展開するところから集落の存在が類推できよう。

奈良時代の溝2条は、ほぼ東西に掘削され、特に調査区南端に存在するSD10は溝幅2m・深さ1mのV字形の溝であり、その性格が今後の課題である。その他古墳時代の遺構からは廻間Ⅲ式後半の土器が出土し、また遺物としては石鏃が認められるところより、近接して弥生時代から古墳時代の集落の存在が想定できよう。(赤塚次郎)



溝(鎌倉) 土坑(鎌倉) 溝・土坑(奈良)

西上免遺跡主要遺構配置図 (1 : 300)